

新国立競技場整備に関する日本スポーツ振興センターの考え方（案）

日本スポーツ振興センターでは、新国立競技場の基本設計を行う前段階として、国際デザイン競技で選ばれたザハ・ハディド氏のデザインを基に、平成 25 年 5 月 31 日、設計者とフレームワーク設計業務の契約を行い、規模やコストなど、基本設計に向けての条件整理を行ってきました。

このたび、新国立競技場の基本設計条件がまとまりましたので別途公表しました。

また、皆様からよくお問い合わせのある質問に対して、Q & A 方式で回答を掲載しています。

Q 1 なぜ 8 万人収容のスタジアムが必要か。

オリンピック・パラリンピック競技大会のメインスタジアムの収容人員規模は、最近の開催地では、2008年北京大会 9 万 1 千人、2012年ロンドン大会 8 万人、2016年リオデジャネイロ大会 9 万人規模となっています。また、東京オリンピック・パラリンピック招致を実現するためには、8 万人規模のスタジアムが必須であると言われていました。現時点では、オリンピック・パラリンピック招致プランによって約束されています。

加えて、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会成功議員連盟の決議においても 8 万人規模の競技場とすることが必要であるとされています。

また、新国立競技場は、今後、50 年、100 年使用することを想定しており、その間、世界陸上や FIFA ワールドカップ（決勝会場は FIFA の規定により 8 万人規模）等の世界的な大規模イベントの会場となることも想定されています。

更に、サッカー日本代表戦や、コンサートなど、大規模なイベントも毎年行う予定です。

これらの大会の開催を決定又は想定していることから、新国立競技場の観客席規模は、国立競技場将来構想有識者会議のご意見も踏まえ、8 万人収容としたところです。

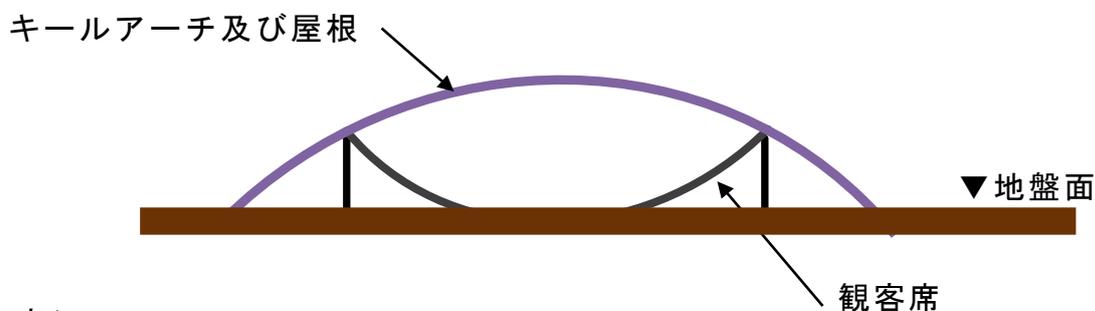
Q 2 観客席の一部は、オリンピック・パラリンピック期間中、仮設対応としてはどうか。

新国立競技場のザハ・ハディド氏のデザインは、キールアーチ及び屋根で上部空間が囲まれています。また、このキールアーチの構造的な負担を客席部の構造体が一部負担することとしています。このようなことから、観客席（椅子）の一部は仮設であっても、この空間に8万席分の構造体を整備する必要があります。（下図参照）

また、新国立競技場は50年、100年使用する計画であり、サッカー日本代表戦や、コンサートなど、8万人規模のイベントも行う予定です。

なお、イベントの都度、仮設席を設置・撤去することは経済的側面から合理的ではないと考えています。仮に観客席を仮設としても、キールアーチの大きさ、客席部の構造体の規模は変わらないため、さほどコスト縮減にはつながらないと考えています。

（参考イメージ図）



（参考）

2万人の観客席整備の試算

○常設として整備した場合

設置費

約5.2億円

○仮設として整備した場合

設置費 約4.2億円

撤去費 約0.6億円

約4.8億円

設置・撤去の都度必要な経費

Q3 ロンドンオリンピックのメインスタジアムと同じような仮設席で対応できないのか。

ロンドンオリンピックスタジアムの整備計画は、観客席の下層部に25,000席を恒久的な席、上層部に5万5千席の仮設席を整備して、オリンピック・パラリンピックを開催し、終了後は、仮設席5万5千席を撤去して売却する計画だったと聞いています。

これは、ロンドン市内にウェンブリー・スタジアム（9万人収容）、トウイッケナム・スタジアム（8.2万人収容）のように、8万人規模のスタジアムが存在しているため、このような整備計画が策定されたものと考えています。

なお、日本には現在、8万人規模のスタジアムは存在しておらず、ロンドンとの事情が異なると考えています。

Q 4 巨大すぎないか。

フレームワーク設計（基本設計に向けての与条件整理）において、国際デザイン競技募集要項で示した諸室構成と各機能の検証を行い、規模の見直し（約 29 万㎡→約 22 万㎡（下表参照））と平行して、デザインの検討を行ってまいりました。

この結果、ザハ・ハディド氏監修の下、デザインを生かしつつ、全体面積の縮減やキールアーチのスパンの縮小、立体通路の縮小など、コンパクト化が可能なことを検証しました。コンパクト化された現在の案は以下のとおりです。

今後さらに、基本設計、実施設計の各段階において、より精度を上げるとともに、ライフサイクルコスト（将来の維持管理コストも含めたトータルコスト）も踏まえた検証を引き続き行ってまいります。

[全体面積の縮減]

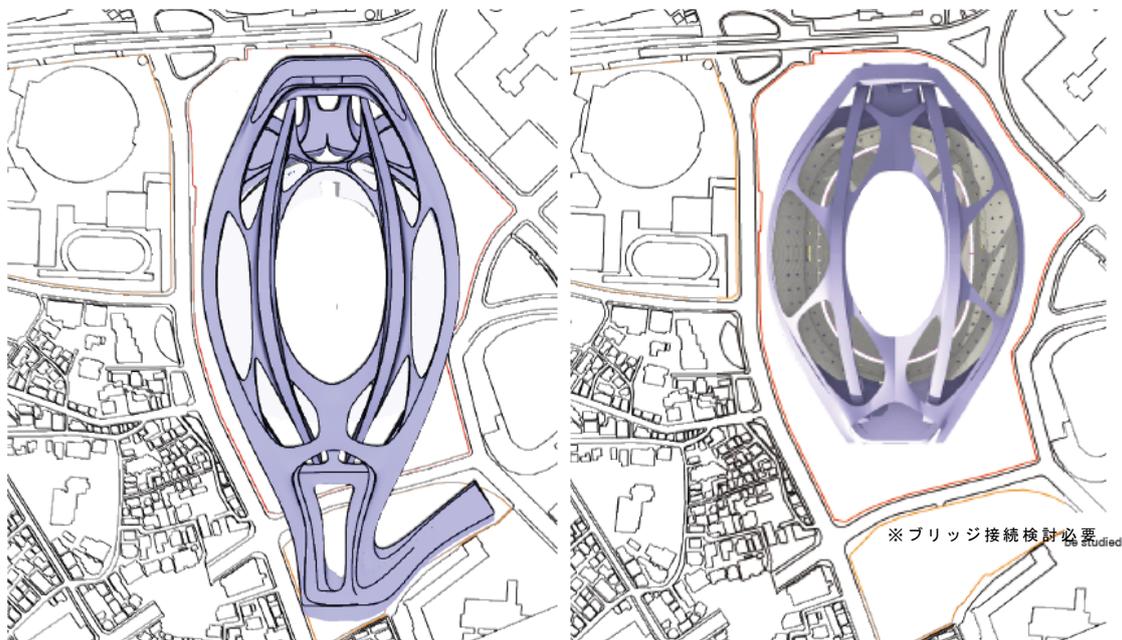
機能	国際デザイン競技時	現在案
競技等機能	約 32,000 ㎡ ⇒	26,180 ㎡
競技等関連機能	約 15,000 ㎡ ⇒	8,410 ㎡
観覧機能	約 111,000 ㎡ ⇒	85,170 ㎡
メディア機能	約 4,000 ㎡ ⇒	3,520 ㎡
ホスピタリティ機能	約 25,000 ㎡ ⇒	20,420 ㎡
防災警備機能	約 1,000 ㎡ ⇒	810 ㎡
スポーツ振興機能	約 21,000 ㎡ ⇒	15,050 ㎡
維持管理機能	約 35,000 ㎡ ⇒	25,070 ㎡
新規機能（立体通路）	— ⇒	5,520 ㎡
駐車場	約 46,000 ㎡ ⇒	34,800 ㎡
計	約 290,000 ㎡ ⇒	224,950 ㎡

(Q 4 関連)

[コンパクト化]

2013年3月時点案

現在案



Q 5 新国立競技場のデザインは神宮の森にふさわしいか。

神宮内苑は、明治天皇・昭憲皇太后を祀るため、神社建築を基調とした明治神宮と清らかで森厳な献木による人工森林となっています。

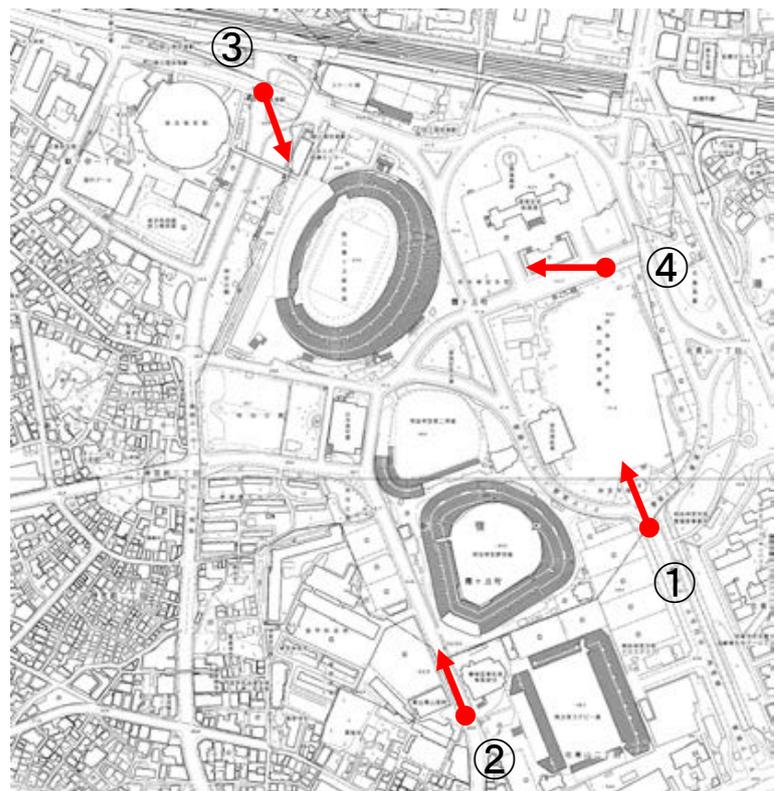
一方、神宮外苑は聖徳記念絵画館を中心に、そのアプローチとしての並木道は、時代に応じた新しいデザインを積極的に取り入れ整備されています。その西部には、体力の向上や心身の鍛錬の場、また文化芸術の普及の拠点として、時代の需要を踏まえ、現国立競技場等のスポーツ施設等が整備されてきました。

このような明治神宮内苑・外苑の歴史的背景を尊重しつつ、今、日本に求められているスポーツ競技施設、文化的な活動の場として再生（建て替え）すべく、日本が持つ最先端の技術力・独自の開発力を集結した、この地域に新しい活力を与えるデザインと考えています。

また、この度、新国立競技場建設地区の東京都市計画地区計画の決定によって、建物高さの最高限度等が緩和されておりますが、明治神宮外苑から東京体育館の一带が、明治神宮内外苑風致地区として位置づけられていることを踏まえて、本地区の歴史的背景等に配慮した計画を進めてまいります。

以下に現在案の場合の周辺からの見え方をシミュレーションしたものを示します。

- ・ 撮影位置・方向は右図のとおりです。
- ・ 撮影は、地上地盤より1.5mの高さで撮影しています。



[現状] ①



[現在案①]



[現状] ②



[現在案] ②



[現状] ③



[現在案] ③

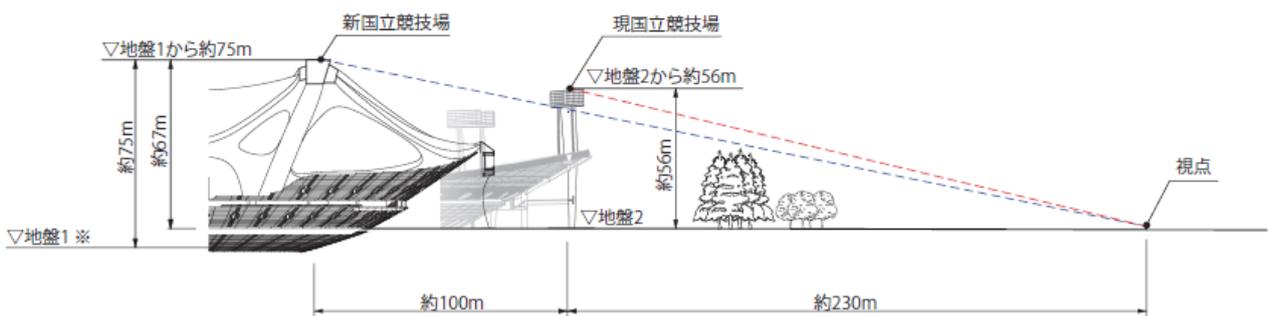


[現状] ④

聖徳記念絵画館前から



[現在案] ④



※地盤1: 平均地盤レベルは、今後の官庁指導及び設計の進捗により設定を行います。

Q 6 開閉式屋根は必要か。

開閉式屋根については、今後の活用やコストパフォーマンスを含めて検討することといたします。

国内外のスタジアムでは、限られたスポーツイベント以外の利用を積極的に取り入れ、収入を上げるように取り組んでおり、特にホームチームを有しないスタジアムにおいて、利用率を高め収益を上げるために、コンサートなどスポーツ以外の利用を積極的に実施しています。

ラグビーワールドカップやオリンピック・パラリンピック競技大会などのスポーツイベントだけでなく、コンサートなどの文化的なイベント利用を想定した場合に、天候に係わらない安定的な開催や増収を図る観点からは、屋根の一部が稼働する開閉式屋根の設置は必要と考えています。

また、コンサート等のイベント時の競技場内の音響性能や、周辺地域への音漏れに対する配慮としても有効と考えています。

Q 7 観客席の可動席は必要か。

新国立競技場は、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会のメイン会場であり、陸上やサッカーなどの競技が行われる予定です。

可動席は、陸上競技のみ、若しくは、サッカー、ラグビーのみを開催するスタジアムとする場合は必要ありませんが、陸上競技とサッカー及びラグビーを兼用する多目的スタジアムの場合、ピッチに近い臨場感あるスタジアムとするためには、陸上トラック部分の観客席が必要と考えています。

また、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会後の運営を考えた場合、収益を上げる観点から、収益性の高いサッカーの代表戦などを積極的に開催することを想定しており、それらを多く開催するためにも可動席は必要不可欠と考えています。

なお、陸上競技場として整備されたロンドンオリンピックスタジアムが、経営上の観点から、改修工事によって恒久的固定席を取り壊し、可動席を改修整備する計画も公表されています。

(参考) 国内外の可動席を設置している多目的スタジアムの例

- ・スタッド・ドフランス（フランス、8万人）
- ・エコパスタジアム（静岡県、5万人）
- ・大分銀行ドーム（大分県、4万人）

Q 8 規模 (29 万㎡) は、他のスタジアムと比較して大きすぎないか。

フレームワーク設計において、運営面や建設費などの観点から総合的に規模を検討した結果、スポーツ競技やイベント開催に必要な機能は維持しつつ、ホスピタリティ機能や商業施設、維持管理機能にかかる面積を見直し、延べ床面積を約 29 万㎡から約 22 万㎡程度に見直しています。

また、新国立競技場は、開閉式の屋根があることにより、その屋根で覆われるフィールド部 (約 2 万 2 千㎡) が床面積にカウントされ、また、敷地の制約によって駐車場 (約 3 万 5 千㎡) の殆どを屋内に設ける必要があることから、見かけ上の床面積は大きくなっているものと考えています。

以下に、北京オリンピック・パラリンピックのメインスタジアムの北京国家体育場及び国内最大規模の日産スタジアムについて、フィールド部と駐車場を考慮した規模を比較した表を示します。

比較表

区 分	新国立競技場	北京国家体育場	日産スタジアム
床面積	224,950 ㎡	202,870 ㎡	172,758 ㎡
特殊要因			
駐車場	△34,800 ㎡	△19,350 ㎡	—
屋根(フィールド部)	△22,000 ㎡	(20,690 ㎡)	(20,900 ㎡)
比較対象面積	168,150 ㎡	183,520 ㎡	172,758 ㎡

※ () の面積は床面積に含まれていないため、床面積から減じていません。

Q9 ホスピタリティ施設はどんなものか。また規模が大きくないか。

ホスピタリティ施設は、BOX席や貴賓室及びそれに伴うラウンジ等を総称していますが、FIFAの規定にも盛り込まれており、世界規模の大会を開催する役割を担うために必要な施設と考えています。

また、付加価値の大きいBOX席等は、増収を図るための有効な機能とも考えています。

この施設は、運営上、できる限りスペースを確保することが望ましい部分であるといわれており、世界の大規模スタジアムと比較しても適切であると考えています。

区分	新国立競技場	トウイックナム ・スタジアム	ウェンブリー ・スタジアム
ホスピタリティ 施設面積	20,420 m ²	27,300 m ²	24,100 m ²
収容人員	80,000 人	82,000 人	90,000 人

Q10 商業施設は大きくないか。また、スタジアムの中に設ける必要があるか。

現在、民間のノウハウを反映するいくつかの事業等の導入を検討しており、新国立競技場というブランドを活かし、スタジアムと連携することで、収益性を強化する事業の創出を検討しています。

商業施設を含むスポーツ振興機能については、当初2万1千㎡見込んでいましたが、集客性や規模の効果を勘案し、スポーツの拠点としての新国立競技場に設置することが望ましい施設（秩父宮スポーツ博物館（現有施設）、トレーニングセンター（現有施設）、スポーツ関連ショップ・レストラン等）に絞ることとし、1万5千㎡に見直したところです。

運営形態の詳細は、今後検討することとしています。

区 分	面 積
秩父宮スポーツ博物館	3,600 ㎡
トレーニングセンター	4,350 ㎡
スポーツ関連ショップ	1,100 ㎡
レストラン	1,000 ㎡
企業（パートナー）・大会運営組織等への賃貸スペース	1,730 ㎡
共用部	3,270 ㎡
計	15,050 ㎡

Q 1 1 駐車場の規模は大きくないか。

新国立競技場の敷地内の駐車場は必要最小限（競技者用、VIP/VVIP 用、メディア用、関係者用、身障者用、バス、荷捌用・中継車用）に絞ることとし、900 台から 662 台に見直しています。

なお、建物面積を縮小した結果、附置義務駐車場の必要台数は 635 台となり、整備予定台数とほぼ同数になっています。

また、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会や大規模国際大会を開催する場合には、近隣の駐車場を借りる、若しくは、仮設で対応することとしています。

なお、大会開催時に新国立競技場を訪れる一般客用は見込んでいませんが、大会等を開催していない時には、施設の有効活用の観点から一般の駐車場として貸し出すことを考えています。

（参考）日本のスタジアムの駐車台数比較

スタジアム	日産 スタジアム	東京 ドーム	豊田 スタジアム	ホームズス タジアム神 戸	福岡 yahoo!Jap an ドーム	北九州 メディア ドーム	大分銀行 ドーム
駐車台数	920 台	500 台	692 台	700 台	2,000 台	1,500 台	845 台